
超文化系ネガティブクラブ『ジサツ部』

三時一分六秒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超文化系ネガティブクラブ『ジサツ部』

【Nコード】

N2154U

【作者名】

三時一分六秒

【あらすじ】

自殺願望者たちを救うための部　ジサツ部。そこには様々な自殺願望を持った少年少女がやってくる。死にたくても、死ぬ勇気のない者達。死にたいと願いながらも救いを求める者。誰かが助けなければいけない、そんな者達を。

ジサツ部部长と幽霊少女。そんな二人のジサツ部活動記。

ぱーと1 (前書き)

これが処女作です。誤字脱字などありましたら教えてください。

ぱーと1

第一章 自殺部じゃないよ！ジサツ部だよ！
ぱーと1

近年、日本国内における自殺者の割合が増えてきている。

日本の自殺率（人口10万人あたりの自殺者数）は五十人で総自殺者数は約六万人にも及ぶ。

年間、死者の五パーセントが自殺によって亡くなっていることになる。

五パーセント、と聞くと一見少なそうだが世界的に見るとものすごく高い割合だ。

日本の自殺者数は世界で第一位であり、未遂者の数もおそらくは最も多いのだろうと思う。

さらに問題なのはその自殺者の内の約七割が俺たち高校生だということだ。

昔は年齢の高い人のほうが「経済的理由」「健康的理由」「家庭問題」「勤務問題」等々の理由から割合が高かった。

しかし、いつからかそんな大人の自殺者が減り、子供の自殺者が増えた。

自殺の方法も様々で、「縊死（首吊り）」、「ガス」「飛び降り」「薬物」「溺死」「飛び込み」とかがある。

他にもいくつがあるが中でもわりと『ポピュラー？』なのがこの六つだ。

んで、その中でも一番人気なのが「縊死（首吊り）」だ。

『縊死』って言うとなんだか分からない奴がほとんどだと思うが、簡単に言えば首吊りのことだ。

この『縊死』が自殺者の死因で一番多いのは昔からで、自殺方法の中でも不動の人気を誇っている。

そして、性別ごとの統計を見ると男のほうが女よりも断然多い。

これは、悩みやストレスを抱えたとき助けを求める事を「恥ずかしい」「もしくは「どちらかというと恥ずかしい」と言うことを女性よりも男性のほうが強く考えているかららしい。

自分に当てはめてみれば分かるはずだ。

男は弱音を吐くことをプライド優先を理由にしないようにしている。

うん。

気持ちは分からなくてもない。

これが原因で周りに相談できずに自殺する男が多いわけだから、

『プライドってなんだろうな』と考えないこともないが。

まあ、理由はいろいろとあるが、要はこれからの日本を支えていくべき世代の俺たちがどんどん死んで逝って大変だと言うことだ。

前置きが長かった割りにはよく分からんまとめになったが理解してくれ、頼む。

うーん、説明ベタだな、俺。

(ねえ、涼二。早くしないと客が帰っちゃうわよ)

ちなみにもっと話は続く予定だったんだが、今回はやめにしよう。

あいつも呼んでるようだし。

そして、何より……

クライアント
依頼主 が待ってるんでな。

ぱーと1 (後書き)

ほとんど主人公に関する説明のない一話でしたが、よければ二話も見てください

パート2（前書き）

サブタイトルが統一されていなくてすみません。

ぱーと2

第一章 自殺部じゃないよ！ジサツ部だよ！
ぱーと2

「あ、あの！私死にたいんですけどどうすればいいですか!？」

部室に来た俺を迎えたのは、少女のそんな言葉だった。

「いきなり直球だな、おい！」

「あ、……すみません。ちょっと興奮しちゃって……」

「まあ、少し落ち着いてくれ」

いかんいかん、あまりにもストレートな言葉につい突っ込みました。
つたぜ。

俺は今回の クライアント 依頼主の少女を目の前の椅子 学校にあるような
木と鉄でできている硬いやつ、に座らせる。

「で、君の依頼は？って聞きたいところだけど……、さっき大きな
声で言ってたからもう分かってるんだけどね」

「~~~~っ!」

なんか今更になって恥ずかしくなってきたらしい。

うむ、かわいい。

「そ、その私のお願いはさっき言ったことで大体合ってます」

『依頼』じゃなくて、『お願い』ってところに萌えるね！

「それで、そ、その……私のお願い聞いてもらえますか？」

そうやってなぜか上目遣いに俺の顔を覗き込んでくる少女に

「もちろん！」

無意識に俺は頷いていた。

しかも、すごい勢いで。

「ホントですか！？ありがとうございます」

「って、違う違う。ごめん今のなし」

だが、途中で我に返って最悪の事態は避けられた。

あぶねー。

今のは危なかった。

あやうくこの部活をダークサイドに墮とすところだったぜ。

まさか、あそこまで破壊力のある上目遣いができるとは。

というか、無意識に上目遣いをしたのか？

まさしく天然系美少女だな。

……うん、女は恐ろしい。

「えっと、だめなんですか？」

なおもかわいく聞いてくる、茶髪のぽわぽわした女の子の言葉に俺は苦しむ。

「ぐっ！」

林涼二に一万五千のダメージ。

しかし、なんとか答えることができた。

「う、うん。だ、だめって言うより……できない？」

「そうですか……」

「……」

「……」

「……」

「た、確かにいきなり『死にたい』とか言われても困りますよね」

俺の言葉にどこか陰りのある表情で納得した少女。

「え、いや、そう言うことじゃなくて」

「すみません。わ、私はこれで失礼します」

少女は俺の否定の言葉も聞かずに椅子から立ち上がり部室を出ようとする。

「あ、ちょ、ちょっと待って!!」

さすがにこのまま帰られるのは困るのでさっきよりも大きな声で言う。

「え?」

慌てて止める俺を不思議そうに見る少女。

どうやら彼女は終わったと思っていたらしいが、俺にとってはむしろここからが本番だ。

俺は深呼吸をする。

いつもこのセリフを言うときに緊張する。

俺の言葉で一人の人間の人生が終わるかもしれないし、続くかもしれない。

そう思つと、いつもいつも言葉を紡ぐのをためらってしまつ。

でも。

言うしかない。

言わなければこの部を創った意味がない。

言わなければこの少女は近いうちに自ら命を絶つだろう。

だから……。

「君のお願いは聞けない」

改めて俺はそう言う。

その瞬間、彼女の表情が再び暗く沈んだものになる。

さっきも言われた否定の言葉をまたも言われるなんて何の嫌がらせだ、と思うような展開だが俺は別に嫌がらせのために言っているわけじゃない。

これからのための 確認だ

「でも、君の依頼は聞く」

「え？」

驚いた彼女に俺は続ける。

「ようこそ、ジサツ部へ。私があなたに生きる理由を与えます」

ぱーと3

第一章 自殺部じゃないよ！ジサツ部だよ！
ぱーと3

「　　というわけなんだ」

「そうなんですか……。つまりこの部は自殺を助ける部じゃなくて、自殺をさせないための部活だったんですね？」

「ああ、そういうことになるね」

俺は引き止めた少女　　後藤奈美子さんにジサツ部についての説明をしていた。

後藤さんが部室を去ろうとした時、呼び止めてキメ台詞を言ってみたのはよかったのだが、そんなことだけでは当然、依頼をしてくれるもはずもない。

そんな理由から、現在進行形で我がジサツ部について説明しているというわけだ。

ちなみに彼女は二年生なので俺の後輩になる。

「確かにジサツ部については分かったんですけど……。つまりここは私が求めているようなところじゃないってことですよね」

「うっ……。まあ、そうなんだけど……」

しまったー！ー！。

これじゃあ、依頼を受けさせるために説明したのに意味ないじゃん！

「……………」

「……………」

「……………じゃ、じゃあ、やっぱり失礼させてもらいますね」

そう言っって椅子から立ち上がる後藤さん。

やばいやばい、帰られてしまう。

俺がどうしようか考えているうちにも後藤さんが部室の扉に向かって歩いていく。

「……………どうしてあなたはここに来たんですか？」

「え？」

散々悩んだ挙句出てきたのはそんなしょうもない言葉だった。

しかし、何はともあれ後藤さんは話を聞いてくれそうなので頑張っって続く言葉を考える。

「後藤さんは最初この部は『自殺を助ける部』だと思っていたんですよね？」

「はい……そうですね」

「それは自分ひとりでは死ぬことができないからですか？死ぬ勇気がなかったからですか？」

「っ！」

「それによく考えるとおかしいんですよ」

俺は彼女とここに今まで来た自殺願望者達のほとんどが持つおかしな共通点について話す。

「……何がですか？」

「近年、高校生の自殺者が増えていることは知っていますよね？」

「え、ええ。まあ……」

俺の問いに戸惑いながらも答える後藤さん。

「競れが理由で、最近、各教育機関　つまり学校では自殺者が増えないための対策を講じているんですよ。……そんなところで自殺を助長するような部が存続できると思いますか？」

「……………」

そう。

それが彼女と、ここに来て死ぬことをやめられた自殺者達のおか

しな共通点だ。

「一人で死ねないなら、集団自殺サイトで一緒に死ぬ人を探せばいい。わざわざ自分の通う学校の、得体の知れない部に来る必要はない」

俺はさっきまでの口調から、本来の口調に戻して続ける。

「探せばこんな部に来て自殺を助けてもらうよりも確実に周りに迷惑をかけずに死ぬ方法なんていくらでもある」

俺の話は続く。

「君は死にたかつたんじゃない。誰かに止めて欲しかった、救って欲しかったんじゃないのか？」

そこまで言って、一息吐く。

「というのが、今までたくさんの自殺願望者たちを見てきた俺の見解なんだが……どうだ？」

「……………」

後藤さんは口を閉ざしている。

おそらくこのまま待っていても彼女の口から答えが出ることはないだろう。

だから……

「では、質問を変えよう」

ぴくっとその言葉に小さく反応する後藤さん。

「お前は本当に死にたいのか？」

俺は彼女の心の奥底に問いかけた。

ぱーと4

第一章 自殺部じゃないよ！ジサツ部だよ！
ぱーと4

唐突だが、俺の知っている危険な自殺者達の話しよう。

俺の知っている中でもっとも危険な人間についてだ。

彼らは一見『普通の人間』と変わらないように見える。

誰が見ても死にたいと思っているようには見えないし、変わっているようにも見えない。

そう。

『普通』なのだ。

どこもおかしなところがないから、誰も彼らが狂っていることに気づかない。

よくニュースで殺人犯や自殺者の家族や知人の話をマスコミが聞いているところが映し出されるだろう。

そこでよく聞くのが『彼が人を殺すなんて思えない』とか『彼女が自殺したなんて信じられない』といった言葉だ。

おそらくこの殺人犯と自殺者は周りからは『普通の人間』として

見られていたのだろっし、本人も『普通の人間』を演じていたのだろっし。

誰にも自分が狂っていることを気づかせずに……誰にも自分が悩んでいることを気づかせずに……。

俺の知っている自殺者にはこの例と同じ『普通の人間のように見える』という共通点を持った奴が二人いる。

一人は、自分の通う学校を全焼させ、全校生徒の三分の二を道連れに自殺した女子生徒。

二人目は、ナイフ一本で小学校に侵入して、十人を殺害、二十余人に重軽傷を負わせた男。

まあ、二つめの事例は元・自衛隊員だからできたことだがな。

俺が突然こんなことを話したのには理由がある。

目の前の後藤さんがその『普通の人間のように見える』自殺者だったからだ。

「し、死にたいに決まってるじゃないですか！」

さっきの俺の質問に過剰なまでに反応する後藤さん。

座っていた椅子からものすごい勢いで立ち上がり、俺に向き直る。

「死にたいから私はここに来たんです！……そう！私は死にたいの

「！」

それは俺に向かって話しているというよりも自分を納得させるために言い聞かせるようにしか聞こえなかった。

「まあ、そんなに興奮するな。言ったる？俺の見解だつて」

あまり興奮させるのも危険だと判断した俺は後藤さんをなだめにかかる。

「で、でも……」

「いいから、まず落ち着け」

「……分かりました」

俺の言葉に渋々といった様子で従い、椅子に座りなおす後藤さん。

「落ち着いたらなら、まずは俺の話聞いてもらおうか」

さも、当たり前のように話を進めようとする俺。

「あ、あの！」

さっきよりもいくらか落ち着いた後藤さんは落ち着いたから故に気づいた違和感を指摘した。

「え、えつと……ちょっと聞いてもいいでしょうか？」

「ん？なんだ」

「なんでさつきと え、えっと名前が分からないので部長さんとお呼びしますね。どうして部長さんは最初に来たときと違う話し方と雰囲気なのでしょうか？」

「あ？ああ、悪い悪いこつちが素なんだよ、俺。最初のは接客用。んで、変えたのはある程度突っ込んだ話もしてるし、取り繕う意味がなくなったからだな。別に俺のこの態度をお前は言いふらさないだろ？お前だつて人には知られたくないことを俺に話したんだから」

俺は後藤さん当然の疑問に答えた後、脅迫といつてもいいような口調で告げる。

「それより俺、自己紹介してなかったっけ？」

「あ、はい」

またやつちまったよ。なんで俺は自己紹介をいつも忘れるのかね。

ん？まてよ。

「でもなんで俺が部長だつて分かったの？」

「あ、それは椅子の数と回りにある本が部長さんの周りを取りやすいように並べてあるからですよ」

「椅子は私の座っているのも入れて二脚しかないし、本も部長さんが読みやすいように配置されていますし」

ほお、といささか感心した俺だが、いまいち判断基準が甘いかなとか考えていた。

要は部屋の物とか椅子の配置が部員を一人だと裏付けてたってわけね。

まあ、後藤さんは探偵ってわけでもないしそこまで考える必要はないか。

「そんなことより、自己紹介だったな」

「え、あ、はい」

そこで俺はいったん居住まいを正し、後藤さんに向き直る。

「俺の名前は林涼二。ここ　南気高校の三年で、このジサツ部の部長をしている。よろしく」

「え？林涼二先輩ですか？」

「ああ、そうだが」

後藤さんは俺の名前を聞くと妙な反応をした。

「あの、全国模試で一位を取る頭脳に、どの部活にも所属をしていないにもかかわらずあらゆる部のエースを凌駕する運動神経を持った涼二さんですか！？」

「あ、ああ。というか、俺のことってそんな風に知られているのか」

「さらには学年問わずに人気のあるその端麗な容姿！私は今日は何も見て見ましたがこんなにかっこよかったのですか！」

「なんだかさっきまで『死にたい！』などといっていたようには思えない、普通の少女への変貌に戸惑う俺。」

「というか、最初に見たときはかっこいいなんて言わなかったじゃないかよ！」

「これが『普通の人間のように見える』ということなのだろうか、改めて怖くなった俺。」

「かくいう俺も似たようなものだが……。」

「と、とにかく落ち着け」

「はっ、す、すみません」

俺の言葉に我に返った後藤さんは恥ずかしそうに謝ってきた。

「俺のことはどうでもいい。とにかく今は君の依頼のことだ」

「え……、どうしてもよくないですよ……！」

「ど・う・で・も・い・い・ん・だ……いいな」

俺の剣幕の押される後藤さん。

「は、は……」

このまま話しては埒が明かないので後藤さんの話を強制終了させる。

話を終わらせられたことに不満げな後藤さんだが依頼の話をする気になってくれた。

「でも、私の依頼は死ぬことですよ」

さっきよりも幾分落ち着いた様子で話を始める後藤さん。

「いや、さっきも言ったように俺には君が死にたいようには思えない」

俺はあくまでも自分の意見を突き通す。

その言葉に少なからず動揺する後藤さん。

「君は自分は死にたいと信じすぎている。……過剰なほどにな」

そう言って俺は後藤さんに微笑む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2154u/>

超文化系ネガティブクラブ『ジサツ部』

2011年10月9日04時51分発行